

# NEWSLETTER of The Japanese Society for Applied Animal Behaviour

## ◇ 新年度に寄せて

応用動物行動学会 会長 近藤誠司  
(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 教授)

恒例の3月末の応用動物行動学会・日本家畜管理学会の春季合同発表会も無事終わり、皆様新年度を迎えてお忙しいことと思います。今年の学会では総数で61課題と昨年に引き続き、盛会でご同慶の至りです。また一般講演終了後には、日本畜産学会と共催で英国 WSPA 代表、M.Appleby 教授の講演会を開催でき、意義深い学会となりました。昨年のニュースレターでアイルランド・ダブリンでの ISAE 国際学会の報告をお送りした際には、博士と応用動物行動学会の若手、それと私がビールを愉んでいるスナップが掲載されましたが、その時点ではご本人が来日されるとは知りませんでした。博士の招聘には前会長佐藤先生の大きなご尽力があったと伝え聞いております。紙面をお借りして、興味深い講演を頂いた Appleby 博士と、ご尽力いただいたばかりか座長も務められた佐藤先生に深謝いたします。



学会前日に応用動物行動学会評議員会、当日のお昼に総会が開催されました。少しずつですが会員は増加傾向にあり、また私どもの学会誌 *Animal Behaviour and Management* 誌には、この時点で既に19編の論文が審査終了し、投稿論文5編が査読を待っているという報告があり、誠に心強い限りでした。立場上、様々な分野の研究会・学会の役員を務めておりますが、どこも会員減少が問題となっている昨今、社会が応用動物行動学を一層必要としていることの証左だと感じました。また会員は若い方々が主力であることも力強く、応用動物行動学の魅力が浸透しているものと喜んでおります。日畜学会の総会で報告された決算では、日畜の雑収入分がほぼ応用動物行動学会の総経費に相当します。この予算で我々は頑張ってますね。

この度の学会は、17時から上述の Appleby 博士の講演があった事もあり、2会場で朝の830から午後一杯びっしりと、非常にタイトなものとなりました。昨年は午前中のみ2会場で、午後からは全員がそろって皆さんの発表を聞けたのですが、今回は一会場に張り付けになり、興味があるにもかかわらず、半数を聞くことができませんでした。

これは大きな問題を含んでいるかもしれません。応用動物行動学会が発足した当時は、「家畜に限らず私どもの生活と深く関係する動物たちの行動を対象としていこう」といっ

た主旨も含まれていたと思っております。私自身は草食家畜を中心に仕事をしておりますが、草食動物の行動や管理だけではなく、窒素負荷や環境問題、イノシシやハクビシン、さらにはイヌ、ネコ、チンパンジー、ニホンザルの研究にも多大な興味を持っているところでもあります。また、発表者も広い分野からの質問やコメントを受けられることがこの学会の良いところであったと思います。プログラム編成担当は大変なご苦労の上プログラムを作成されたものと察しますが、2会場を設けないと1日では終わらないという枠の中では苦衷の編成ということになったのでしょう。

もし、次回以降も前回と同じ程度の発表数が合同発表会で行われるとするならば、そろそろ我々は新たな道に踏み出す時期に来ているのではないのでしょうか。すなわち、この学会に結集した同じ志をもつ研究者は、全ての発表を聞く機会を得られるよう、1会場で行うという方向です。これは2日間の学会を実施するということになります。これには様々な困難があるのを承知の上で申し上げます。実際、現行の3月の学会シーズンは一番出席しやすいタイミングですし、他の時期に独立して大会を行うとなると、皆様の足並みがそろうかどうか分かりません。どこで行うかという会場の問題もあります。日畜大会におんぶでだっこであれば、たくさんのジョブが省力的に行えるのは事実です。

とはいうものの、今のままで行っていくのは本来の私どもの主旨とは異なる方向に行ってしまうかもしれないという危惧は拭えません。他の農学分野で散見されるような、それぞれの分野で特化・先鋭化したタコツボ戦略では、これからの行動学も管理学も論ずることはできないでしょう。

新年度の会長挨拶としては、ずいぶんと過激な発言となりました。しかし、どうか皆さん、この機会に前向きにご検討いただきたいと思っております。私どもの学会はその前身の「家畜行動小集会」の時代から、常に若手が「過激に、したたかに」運営してきました。幸いなことに、現在の執行部が若手が牛耳っておりますが、さらに一層若い世代が「アラカンやロートル、撲滅！」と叫び、学会の鼻面を引き回すのも大いによろしいところ、是非新たな道を見つけてください。

## ◇ 総会報告

応用動物行動学会 副会長(事務局長)  
森田茂(酪農学園大学)

2009(平成21)年度応用動物行動学会総会が2009年3月28日12:30より13:00まで、日本大学生物資源学部本館5F53教室にて開催された。前日行われた評議員会での議論をふまえ、事前に配布した資料に沿って2008年度活動報告、会計報告、会計監査報告がなされ、承認された。また、2009年度事業計画案および予算案が提示され、審議のうえ、承認された。



楽しい食事中とは思えない表情の会長(右)と

当日審議の説明内容

- 1) 昨年度総会にて取り上げた役員の任期(家畜管理学会との調整)は、会則に係わることであり、内容を精査し、次回総会に諮ることになった。また、臨時的な事業担当幹事設置についても、会則上の任期との関係を考慮する。
- 2) 日本動物行動学会、日本動物心理学会との合同大会(3学会合同大会)の詳細は、2009年度に検討する。予算的措置も含め検討が必要である。
- 3) 家畜管理学会などとの共催で、秋のシンポジウムを開催する。本年度秋には沖縄にて日本畜産学会があることから、これにあわせ企画する。
- 4) 国際応用動物行動学会議への発表者派遣該当者として、小針大助(茨城大学)、加瀬ちひろ(麻布大学大学院)、小山奈穂(麻布大学)が決定した。総会後に贈呈式を行った。



近藤会長から派遣金を授与される加瀬さん

2008 年度決算

2009.2.28

項目	収入(円)		支出(円)	
	2008予算	2008決算	2008予算	2008決算
前年度繰越金	344,053	344,053	会誌発行費	280,000
個人会費	300,000	352,000	シンポジウム・学会費	50,000
賛助会費	0	0	会費	12,000
雑収入	1,000	447	通信費	1,000
			消耗品費	1,000
			謝金	2,000
			手数料	1,000
			予備費	298,053
合計	645,053	696,500	合計	645,053
				298,511

収支差額 397,989円

個人会費内訳: 2006年度4,000円、2007年度24,000円、2008年度244,000円、2009年度68,000円、  
2010年度8,000円、2011年度2,000円、2012年度2,000円

雑収入: 利子

会誌発行費: 管理学会との合同出版の経費負担分。印刷費の約26%負担。

会費: 総会軽食代金

消耗品費: ファイル代金

収支差額 397,989円は、2009年度繰越金とする。(総会での承認後)

特別会計 2008予算

国際応用動物行動学会派遣など基金予算 (設立 2006/02/26 当初 3,026,977円)

項目	収入(円)		支出(円)
前年度繰越	2,381,586	研究発表者派遣補助	270,000
利子	3,000	役員派遣補助	130,000
		市民公開シンポ	50,000
		送金料など	1,500
合計	2,384,586	合計	451,500

2008年度末基金残高(計画) 1,933,086

特別会計 2008決算

国際応用動物行動学会派遣など基金決算 (設立 2006/02/26)

本基金はISAE2008開催の余剰金を基に設立され、その管理・運用は、総務課に基づき国際応用動物行動学会が実施している。

項目	収入(円)		支出(円)
前年度繰越	2,381,586	研究発表者派遣補助	270,000
利子	2,595	(多田、新村)	
		役員派遣補助	130,000
		(ISAE2008 返還額等)	
		市民公開シンポ	50,000
		送金料手数料	472
合計	2,384,181	合計	450,472

2008年度末基金残高 1,933,709

資産合計	1,933,709
資産内訳	
銀行口座	1,651,243
郵便貯金	112,350
現金	170,076

特別会計 2009予算

国際応用動物行動学会派遣など基金予算 (設立 2006/02/26 当初 3,026,977円)

項目	収入(円)		支出(円)
前年度繰越	1,933,709	研究発表者派遣補助	200,000
利子	1,500	役員派遣補助	200,000
		市民公開シンポ	50,000
		送金料など	1,500
合計	1,935,209	合計	451,500

2009年度末基金残高(計画) 1,483,709

## ◇ 会誌 Animal Behaviour and Management (ABM) の投稿規程が改訂されました



応用動物行動学会 副会長(ABM 編集委員長)  
植竹勝治 (麻布大学)

2009年3月28日に日本大学生物資源科学部湘南キャンパスで開催された総会において、昨年度の総会(2008年3月28日)で提案し、1年間に渡り一般会員からのヒアリングを行ってきました会誌 ABM の投稿規程が、別紙の通り、全面的に改定されました。これから投稿を予定されておられる方は、新しい投稿規程での原稿作成をお願いいたします。不明な点がございましたら、遠慮なく編集委員会 (Email: uetake@azabu-u.ac.jp) までお問い合わせください。

昨年度(2008年度)の ABM への投稿実績は、研究発表会講演要旨を除く、応用動物行動学会への論文(総説・原著)・報告・書評の投稿が、印刷ページ数で 27 ページとなり、家畜管理学会への投稿を合わせた全体の会誌印刷ページの 29%を占めました。これは一昨年度(2007年度)がわずかに 4%であったことを考えるとめざましい増加と言えます。これには、研究発表会での学生の発表が約半数を占めるなど、若い人たちの台頭が反映していると思われます。編集委員会では、ABM の学会誌としての掲載記事の質の向上・確保に今後とも努めて参りますが、同時に学生を中心とした若手の論文投稿の登竜門として、ABM が役割を果たしていければと考えています。引き続き、皆様の ABM への積極的なご貢献とご支援をお願い申し上げます。

## ◇ 2008 年春季研究発表会報告

小針 大助 (茨城大学)

本来なら大会委員長が報告となるところですが、ご多忙により、大会に参加できなかったということで、NL 幹事からの報告に代えさせていただきます。

昨年に引き続き、本年度も 61 題のエントリーと非常に多くの演題登録があり、2 会場に分けての発表会の実施となりました。演題の幅も年々広くなり、畜産管理関係の話題はもちろんのこと、展示動物関係 7 題(類人猿の発表は実験動物とすべきかもしれないが)、伴侶動物関係 4 題、野生動物関係 13 題と多種多様な話題提供がありました。これは行動学的スキルの実践と応用に主眼を置き、さまざまな分野の研究者が一堂に会して議論し合える、応用動物行動学といった分野ならではの状況であり、今後の、この会を通じた更なるネットワークの広がり期待させるものでした。一方、学生の参加者や発表者が多かった割に、発言の方はやや少なかつたようにも感じられました。若手には非常に寛大な本学会としては、学生会員には是非とも積極的な発言を期待したいと思います。

また、本大会でも大会実施に際しての時間的な問題が指摘されました。議論が白熱することは大いに結構なことです、それによる発表時間の遅れも多々見られ、会場の利用時間もぎりぎりとなったところもありました。その影響を受けて、発表会の後に予定されて

いた、公開講演会のスタートも遅らせざるをえなかったという問題もでました。年々エントリー数が増えてきている現状に対して、昨年も大会委員長からご指摘がありました(本ニュースレターで会長も指摘されているが)、学会スケジュールの組み立てや発表時間の再考も必要だと思います。1日で60題前後の発表をどのように振り分けていくか、会期や会場利用のことも考慮して、評議員会や総会でも議論していく必要があるものと感じました。

学会後のシンポジウムの演者であった Appleby 氏を交えての懇親会は、今年も盛況でした。これはご多忙の中、事前準備に奔走していただいた青山幹事のおかげです。この場をお借りしてお礼申し上げます。

## ◇ Michael C. Appleby 講演会「Farm animal welfare science : Recent topics」報告

加隈 良枝 (帝京科学大学)



去る 2009 年 3 月 28 日、日大生物資源科学部湘南キャンパスで催された応用動物行動学会の春季研究発表会終了後、日本畜産学会および日本家畜管理学会との共催シンポジウムとして Dr. Michael Appleby の講演会が行われた。家畜福祉の話題について、畜産学会と共催というかたちで取り上げることが出来たのは、このような分野の重要性が最近いかに浸透し始めているかを示すようにも思われる。

Dr. Appleby はイギリス出身の行動学者であり、もともと家禽の行動および福祉の研究で多数の論文発表があるばかりでなく、動物福祉の概念に関する論説や、専門家や一般人向けの動物福祉の教科書や入門書といった著作もあることから、本学会にはなじみ深い方も多いただろう。今回の来日を実現したのは、東北大学の佐藤衆介先生がエジンバラ大学留学時代から、長く良き友人関係であったことによるところが大きいですが、私自身にとっても留学時代にお世話になった先生の一人であり、慣れない環境と英語に四苦八苦していた私を折にふれて励ましてくれる存在だったので、今回の来日で 10 年ぶりに再会し、通訳などのお手伝いをするのができたのは非常に嬉しかった。

講演は、アニマルウェルフェアのサイエンスや研究という側面に焦点を当て、どのようなトピックが含まれるのかということ、昨年アイルランドのダブリンで開催された ISAE で発表された内容にもとづいて紹介するというものだった。繁殖成功やストレス、疾病や傷害、そして行動を指標として捉えるといったことは以前から行われている研究分野であり、獣医学の観点からも非常にわかりやすい。しかし最近、知覚能力や痛み、認知、情動などといった分野への注目度が増しており、その対象範囲も魚類や甲殻類・軟体動物等に関するものまでみられる。ウェルフェアに関する議論には、大別すると上述のような生物学的側面、動物の心理状態の検討に加えて、自然状態に近いかどうかという問題、という 3 つの分野が関係している。これらのうちどれか一部分だけでウェルフェアに関する結論を出すことはできないのだ、といった解説がわかりやすくなされた。

また、博士は現在 WSPA (世界動物保護協会) の主任科学顧問を務めているということも

あり、動物福祉に関する世界の動きについても言及された。動物について考えることは周囲の人間を含めた社会、さらには地球環境全体を考えることであり、国や文化の違いをこえてこれからも一緒に取り組んでいくべきだ、といった主旨でしめくられたと思う。

講演会は長時間にわたる研究発表会の終了後、言語が英語のみということもあってか、大観衆というわけではなかったが、それでも熱心な本学会員、特に若い学生たちの姿がとても多かったように感じられた（この後の懇親会が目当てだったのかもしれない）。終了後、会場からいくつかの重要な質問が出されたため、急遽通訳を務めることとなった。ヨーロッパではオーガニックやアニマルウェルフェアといった概念が一般市民にも良く浸透しているように思うのはなぜか、教育によるものなのか、という質問に対して博士は、マスコミで話題が取り上げられることの影響も含めて、情報が一般市民に浸透していて、かれらが特定の商品を求めることは、ウェルフェア向上のための一要因だろうと述べられた。一方、日本ならではの「動物愛護」という思想について、動物福祉との区別が非常に難しいという意見が会場から出されたが、「愛護」の訳にいつもながら苦労してしまい、なかなか端的な回答を博士から得ることができなかった。愛護は Love & protection なのか、care なのか、compassion なのか、一つの英単語で説明することはほぼ不可能だと思われる。

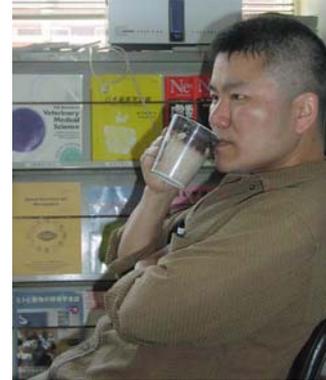
訳の話題となったところで締めくくりで紹介させていただきたいのだが、博士が編著者の一人である書籍 ”Animal Welfare” (M. C. Appleby & B. O. Hughes) の訳本が、博士の来日に合わせ緑書房より発刊の運びとなった。監修をされた佐藤衆介先生と森裕司先生により「動物への配慮の科学」という日本語タイトルが付けられた本書は、本学会員の若手有志の先生方の奉仕精神のたまものでもある。アニマルウェルフェアに研究や実践で取り組もうとする人たちにまず読んでいただきたい本である。余談ではあるが、日本語に少なからず関心をもつ Mike に、日本では Animal welfare の訳には「アニマルウェルフェア」と「動物福祉」があるのもめめるのだ、ということを移動の車中で話した。訳本では基本的に「アニマルウェルフェア」を使っている（経緯については購入のうえ佐藤先生の解説を読んでいただきたい）。カタカナは外来語に使うのだと説明したところ、「じゃあ、アニマルウェルフェアというのは日本のものじゃないんだ、と思う人が増えていくのかもしれないね。」と指摘され、どうなのだろうかと思ってしまった。数年前に国際学会で日本人大学生の動物福祉についての理解や意識についての調査結果を発表し、愛護の概念との混同や animal welfare の概念とのずれについて考察を述べたときにも、重鎮 Prof. Donald Broom から、「英語圏のなかでも animal welfare の定義はさまざまに話が噛み合わなくて困るのに、訳の問題も関わってくるから問題はもっと複雑かもしれないねえ。」と同情された。日本での farm animal welfare science の今後の進展に大いに期待するが、日本的なウェルフェアが出来上がっていくのだろうか、あるいは博士の講演で示されたようにグローバルな welfare にもつながっていくのだろうか。さらに 10 年くらい経ってから、ぜひまた Appleby 博士のコメントが聞いてみたい。



## ◇ 「その性格なんとかならない？—動物の気質・個性とそれを知る大切さ—」 応用動物行動学会・日本獣医学会共催シンポジウム報告

シンポジウム担当 青山 真人（宇都宮大学）

2009年4月1日、私青山の所属する宇都宮大学で、動物の性格（気質）に関わるシンポジウムを開催した。森裕司（東大）、杉田昭栄（宇都宮大）、二宮茂（東北大）、武内ゆかり（東大）の、4名の先生による講演を頂いた。どの先生の講演も興味深いものであったが、その内容の紹介はこの後の「参加学生からの報告」と、各先生方からの報告にゆずるとして、ここでは、本シンポの開催の経緯を紹介させて頂こうと思う。



2009年4月2日から4日まで、JRA競走馬総合研究所（総研）の主催で、ここ栃木県宇都宮市で、第147回日本獣医学会学術大会が開催された。私にとっては、地元ということもあって、なんとかこれに合わせて、日本獣医学会との共催でシンポジウムを開催したいと思っていた。昨年7月のうちに、日本獣医学会の理事長である西原先生（東大）と、今大会事務局である総研の間（あいだ）様に承諾を頂き、獣医学会の本番にぶつけないように第一候補日を4月1日に設定した。実はこの4月1日が今大会のキーであったのである。一般の関心が高そうなテーマとして、「性格」と「外来生物」の二つが浮かんだが、私は初めから、日本獣医学会員の講演者として東大の森先生と武内先生を頼るつもりであったので（森先生と武内先生は私の元指導教官であるので、お願いはし易かったのである）、先生方の研究テーマの一つである「性格」に決定した。ちなみに、3月7日-8日に東大で開催された第15回ヒトと動物の関係学会で、外来生物のシンポジウムが開催された（私はこのことを、プログラムを見て初めて知った）。カブらなくて良かった。

次は講演を頂く先生を探すこととなった。もちろん、森先生と武内先生は快く引き受けて下さった。宇都宮大学で開催することもあって、私の今の上司である杉田先生に、カラスの個性の講演を依頼したところ、引き受けて下さった。しかし、家畜の性格に関する講演を頂く先生の選定は難航した。まず、主催機関である総研の楠瀬さんにウマの性格の講演をお願いしたが、楠瀬さんは獣医学会大会のスタッフにしっかりと組み込まれており、前日の4月1日から多忙で、無理であった。次に、玉川学園大の安部先生にウシの性格に関する講演をお願いしたが、4月1日は多くの私立大学では、辞令を受け取る非常に重要な日であるとのことで、やはり無理であった。安部先生にはなんとか講演を頂きたかったのであるが、日程を4月1日から動かすことはもう難しくなっていたので、今回はやむなく見送った。そこで、楠瀬・安部両先生に関連が深い二宮先生にお願いするに至ったのである。

次は宣伝である。いつものようにメーリングリストに流した。麻布大学の植竹先生が、このシンポのことを、緑書房の羽貝様にお話し下さったところ、興味を持って頂き、宣伝にご協力頂いた。ポスターの作成をいつものように始めた。イヌのいろんな表情の写真を得ようと、イヌを飼っている学生たちに頼んだが、喜んでいたり、リラックスしているイ

又の写真しか集まらず、恐がっている、怒っている、といった表情の写真はなかった。そこで、近所で飼われている、男性が大嫌いな「ハナちゃん」というイヌに私が近づき、怒ったところを写真に撮ることになったが、なぜか私には攻撃をしかけて来なかった。やむなく、ハナちゃんを蹴るふりをして（あくまでも「ふり」であって実際に蹴ったわけではない）、吠えてきたところを写真に撮った。噛まれそうで恐かった。ポスターが完成したら、近所のスーパーやペットショップへの掲示を頼んで回った。同じ系列のスーパーなのに、快く引き受けて下さり、掲示まで手伝って頂いた店もあれば、断られた店もあった。いったいどういう基準で決まっているのだろうか。

シンポ当日、私が当初考えていたよりは人が集まらなかった（約50名）。やはり、4月1日という日が難しかったせいもあったらしい。しかし、正田陽一先生がお見えになり、とても驚いた。上野動物園にボランティアに行っている学生がいたので、彼女にチラシを渡して宣伝をお願いしたのが、そこで本企画のことを聞き、足を運んで頂いたのだった。また、盲導犬（名はアンソニー）を連れた目の不自由な方がお見えになった。実は私は、盲導犬を連れた目の不自由な方を近くで見たのは初めての経験だったのであるが、普通に歩いておられるように見えたので、その方の目が不自由とははじめ気付かなかった。盲導犬の「凄さ」を知った。

最後に、このシンポにご協力頂いた全ての方に感謝致します。ご多忙中にも関わらず講演を引き受けて下さった4名の先生方、ありがとうございます。（決してタダではありませんので・・・）今後もよろしくお願い致します。また、遠いところお越し頂いた会長の近藤先生、シンポの後に、飲みにつき合って頂いてありがとうございました。近藤先生と近くで飲んで話すことは実は初めてであったように思います。良い経験になりました。宣伝にご協力頂いた、羽貝様をはじめとする緑書房の皆様にも感謝致します。会場で、シンポ終了後に少しお客様と話す機会があったのですが、少なくとも二人は、緑書房様のホームページをご覧になって本シンポのことを知ったそうです。また、特にお願いしたわけでもないのに、自分から協力を申し出て下さった、藤原克彦准教授と、動物機能形態学研究室の学生の諸君にも、感謝致します。特に、宇都宮大学の馬術部主将でもある金田広樹は、私の「無茶振り」にもしっかりと対応し、二宮先生にウマの柵癖についての質問をしてくれました。学生からの発言も欲しかったので、嬉しかったです。彼には、さらにこの後の「参加学生からの報告」もお願いしてしまいました。そして最後に、個人的に、盲導犬の「凄さ」を見せて頂いた、会場で会った目の不自由な女性と、そのパートナーのアンソニーに感謝したいと思います。本当にありがとうございました

## ◇「動物の性格に関するシンポジウム」 参加報告

金田 広樹（宇都宮大学農学部4年生）

今回のシンポジウムは我らが宇都宮大学にて行われました。開催当日は4月1日（エイプリルフール）という何とも怪しげな日だったのですが、講演者の4名の先生方の講演は日々の研究の成果にもとづくとても現実的なものでありました。恥ずか



しながら、私（演題表示係）はシンポジウムというものに初めて参加させていただきました。シンポジウムというと、何となく堅苦しく難しいものであるという印象を持っていましたが、いざ先生方の講演が始まると、スクリーンには漫画のような図やかわいらしい動物の写真が数多く映し出され、尚且つ先生方の話す内容は特別な知識がなくとも十分理解できるものであり、私は終始先生方の話に聴き入ってしまいました。私だけでなく、参加されていた方々誰しもが、興味深げに、時たま頷きながら真剣に講演を聴いていたことが、今回のシンポジウムの素晴らしさを物語っているのではないのでしょうか。

さて、本題のシンポジウムの内容ですが、「その性格、なんとかならない？—動物の気質・個性とそれを知る大切さ—」と題され、講演者は、森裕司先生（東京大学大学院）、杉田昭栄先生（宇都宮大学）、二宮茂先生（東北大学大学院）、武内ゆかり先生（東京大学大学院）の4名の方でした。

森先生の講演で、私が個人的にとっても印象に残っているのは、スクリーンに映し出された絶妙なイヌやヒトの図です。何方がお描きになったのかは分かりませんが、とても個人的で、イヌがぼそっと発するコメントにリアリティーがあり、とてもたのしくお話を聴かせていただきました。

私の所属する研究室の教授である杉田先生の講演は、「カラスに個性はあるのか」というテーマでした。私たちが普段、厄介者として個性など考えたこともないようなカラスについて、先生の日々の研究や研究室の学生の研究から得られた、カラスの学習能力に関する様々な実験データを紹介していただき、参加者がカラスの個性について考えるきっかけを示してくださいました。

二宮先生の講演は、ウマに関するものであり、馬術部に所属する私としてはとても気になっていた講演でありました。先生のお話の中で興味深かったのは、さく癖や熊癖は他のウマのやっているのを真似するかどうかはまだ解明されていなく、飼育環境の悪さ（牧草の不足など）によるストレスが原因であるというものでした。この講演で得た情報を今後の部活動に活かしていきたいと考えています。

武内先生の講演は、視覚的にとても分かり易い講演でありました。様々な犬種について、まるでゲームのキャラクターのステータスを表すかのように、攻撃性や訓練性などの細かな気質を紹介してくださいました。新たにイヌを飼おうという方にはとても参考になったことと思います。また、既に飼っているという方には、愛犬との接し方を考える良いきっかけになったのではないのでしょうか。私個人的には、チワワの攻撃性が意外に高かったことが驚きでした。某CMで、ウルウルした瞳で愛嬌を振りまいていた裏には、意外な攻撃性を秘めていたのでしょうか。

私にとって今回のシンポジウムは、普段接する様々な動物に対して、彼らとのより良い付き合い方を考えるとても良いきっかけとなり、参加できたことをうれしく思っております。シンポジウムを紹介していただいた青山先生、貴重な講演をしてくださいました先生方に感謝致します。

## ◇ 通信・HP・海外学会案内関連

通信担当 竹田謙一(信州大)

学会ホームページのURLは、  
[http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab\\_index.htm](http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm)  
です。シンポジウム、大会の開催案内をはじめ、学会誌目次、  
ニュースレターを順次、アップしています。ぜひ、ご覧ください。  
直近の更新は、4月末を予定しています。

新年度になりました。登録されているメールアドレスに変更  
がございましたら、お知らせください。また、メーリングリス  
トは学会事務局等からのお知らせだけではなく、皆さまの活  
発な議論の場でもあります。ぜひ、ご活用ください。



## ◇ 会員担当

瀬尾哲也(帯広畜産大学)

氏名、メールアドレス、住所変更、入退会希望  
などがありましたら、seo@obihiro.ac.jp までご連絡  
ください。



## ◇ 学会年会費納入のお願い



会計担当 出口善隆(岩手大)

本学会の会計年度は、3月1日から翌年の2月末日までとなっ  
ております。年会費を未納の方は、年会費(2,000円)をお  
振り込み下さるようお願い申し上げます。

本年度(2009年度)会費未納会員は86名、2008年  
度会費未納会員は13名となっております。本学会の収入は個人会費のみです。未納会費  
金額は、2009年度予算の会費収入金額の80%に相当いたします。このような状況が  
続けば、学会活動に支障が出ることも予想されます。

本学会財政を健全化するために、学会年会費のすみやかなお振り込みをお願いいたしま  
す。

お振り込み方法

「郵便振替口座」に、年会費をお振り込みください。

加入者名 応用動物行動学会

口座番号 02790-9-13298

なお、お手数ですが、お振り込みには郵便局に備え付けの「郵便振替払込用紙」(青色、振込人が振込料金を負担する用紙)をご利用ください。

過去の年会費振り込み状況がわからない場合は、  
会計担当幹事：出口善隆 (deguchi@iwate-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

## ◇ 編集後記

NL 担当 小針大助 (茨城大)

茨城では桜も終わりを迎つつあり、いよいよ研究シーズン本番といった季節になってまいりましたが、会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか？

今回のニュースレター No.16 では、春に開催されました総会及び大会、シンポジウムの報告を中心にお伝えいたしました。本原稿の取りまとめにあたりまして、一部依頼連絡の不行き届きがありまして、執筆担当者にはご迷惑おかけいたしました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。なお、ニュースレターは、本年も年4回の定期発行を予定しております。会員の皆様からも情報を募集しておりますので、配信希望がございましたら、以下の連絡先 (kohari@mx.ibaraki.ac.jp) まで、ご連絡よろしく願いいたします。



ベルギー・ゲントにて新村会員(右)と cheers!